



学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和3年 10月4日 10月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

「なりたい自分」を語ってみよう

校長 黒木 健

先週末で一カ月に及んだ分散登校も終了し、やっと通常時程による教育活動を始めることができることとなりました。子どもたちが少しでも早くこれまでの生活パターンを取り戻せるよう、全力で支援に当たって参ります。引き続き、保護者の皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。さて、今月の学校だよりは、私の前職時代の経験から話をさせていただきたいと思います。

少々前のものにはなりますが、「日本経済新聞」にこんな興味深い記事がありました。その記事によると、ある調査機関が高校生を対象に実施した調査で、『「暮らしていける収入があれば、のんびりと暮らしていきたい。」という考えに、「とてもそう思う。」と答えた高校生の割合は、米国13.8%、中国17.8%、韓国21.6%に過ぎなかったのに対し、日本では42.9%にも達したとの調査結果がまとまり（中略）、この記事の結びは、「何となくというのは人生の目標とはなり難く、今後どんな目標を立てていくのかが、今の若者たちに問われている。』』といった言葉で締めくくられていました。最近になって手元に残っていたこの記事に関するメモを改めて読み直してみて、こうした海外の学生たちの考え方を裏付けるような体験が、以前自分にもあったことを思い出しました。

会社員であった前職時代、中国に駐在していた頃のことです。当時、私が住んでいたのは、首都北京市の中心部にある天安門広場から北西へ直線距離で15キロ程のところにある西直門という地域でした。そこは、習近平国家主席が卒業した理系の雄、清華大学や、李克強首相も学んだ北京大学といった中国の最高学府をはじめ、数多くの大学が集結する一大学園都市に程近く、その境界の図書館やカフェにでも足を運べば、いつでも熱心に勉強している学生たちの姿を目にすることができ、そんなエリアでした。駐在3年目の2008年8月に開催された「北京オリンピック・パラリンピック」の折、私が勤務する職場に大勢の大学生ボランティアが派遣されてきました。各国からその関連で北京にやって来た外国人観光客の接遇や観光案内などが、政府から学生たちに与えられた役割です。オリンピック・パラリンピック開催期間中、私はその学生たちと一緒に仕事をしながら、北京での学生生活の様子や卒業後の進路などについて、様々な質問を投げかけてみました。その中で一番印象に残ったのは、大部分の学生が、卒業後のビジョンを明確にもっていて、またその答えも「自身で起業し経営者となって、自分を育ててくれた両親を支えたい。」というものがほとんどでした。しかしその後の駐在生活の中で、その時やや驚きをもって感じられた学生たちの将来に対する考え方は、中国人の中ではごく一般的な価値観であることを知るに至りました。

新聞記事は各国の高校生についての、私の体験は中国の大学生についての話ですので、日本の小中学生のそれとは直接は結びつかない話かもしれません。しかし、今になって思い返してみると、将来の夢のもち方について、色々な意味でヒントを与えてくれるものだったのではないかと感じています。小中学生であれば、「就きたい職業」や「将来こんな人になりたい」といった思いが途中で変化することだってあるはずですが、でも将来の夢をもつことで、それに向かって前向きに頑張ることもできるはずで、またそれは、「なりたい自分」を語る際の材料にもなり得るものだと考えています。未来に向かって一人ひとりの子どもが、「なりたい自分」を積極的に語れるようになるためにも、ご家庭と学校との両方で、様々な支援を続けていくことができればと思っています。